

わたしの戦争体験

筑後市 田中 續

○ 開戦

昭和16年12月8日、家の四球ラジオはけたたましく軍艦マーチをかなで「大本営発表、帝国陸海軍は、本朝未明南太平洋にて米英両国と交戦状態に入れり」と報じた。

国定教科書、国語で「サイタ、サイタ、サクラガサイタ。コイ、コイ、シロコイ。ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」の教えを受けた私は血湧き肉躍るの感がした。新聞は真珠湾攻撃の大勝利を掲載、「岩佐中佐、廣尾彰大尉（佐賀県三養基中出身）等九軍神特殊潜航艇」と勝利に酔いしれた。

当時大牟田市に住んでいた私は、開戦前5月27日（海軍記念日）には、佐世保軍港より三池港に寄港、一般公開されていた二等巡洋艦を、またドイツから来て市役所前を行進していたヒットラーユーゲント（少年親善使節）を見物した。西暦より660年早い紀元2600年の祝典が三笠神社で行われ、祖国不滅、悠久の大義を祈願した。戦局も日ましに不利となった19年頃には甲飛、乙飛に志願してゆく友の駅での別れが通例となった。「赤い血潮の予科練の七つ釘は桜に錨」とタオルをふって征途を祝した。

○ 空襲

19年4月、軍需景気にわく市は、三井三池染料従業員5万、製煉所3万、製作所1万と炭都一丸となって聖戦遂行に拍車をかけていた矢先、有明海上より旋回してきたP51敵機は染料を狙って爆弾を投下してきた。

ドドド落雷と覚える地響と共に三池山の方に黒煙が上がった。急ごしらえの防空壕から私は飛び出し一目散にその方向に走り出した。すると染料への直撃がそれでU医院に落下、防空壕に避難していた家族が全滅、その肉片が岡のお寺の軒にぶらさがっていた。血湧き肉躍るの若者の心は恐ろしさと、悲惨さにどきっとした。

同年6月、西部軍管区発表「空襲警報発令」と同時に小指ほどのB29が3、4機編隊を組み高度1万mで飛来するようになった。

キラキラと銀翼が肉眼で見え、飛行雲をひいていた。夕暮れ、いつでも外に飛び出せるように着のみ着のままで灯火管制の下うとうとしていると、けたたましくサイレンが吹鳴、同時にヒューザザードドン、炸裂が大地を揺がした途端一気に噴煙が前方に飛び散った。

私はどう逃げたか覚えていない。あたり一面ガソリンの匂いが充満し、四方八方火の海である。いつのまにか子供の頃よく遊んだグランドにきていた。側に老婆が「南無阿弥陀仏ー」としきりに念仏を唱えている。赤ん坊がヒーヒーと泣いているので見ると、母親が背負った防空頭巾の綿に火がついてじわじわ燃えている。とっさに私は手でその火をもみ消した。わたしは恐ろしくなり、堂面川よりの長溝堰の方へ突走った。幸い堰に水はなく、うずくまり息をひ

そめ爆音が消え去るのを待った。夜が白々と明け始める頃「ツツキー、ツツキー」と私の名を呼んでいる。薄やみの中から姉の顔が見えた。雑巾バケツをかぶり顔がひきつっている。「家は」「大丈夫」姉の声が返ってきた。東の空が明るみ始めていた。

この空襲で市は殆ど焼け、松屋デパートと黒くカムフラージュした市庁舎がのこった。現存する市庁舎は戦時下の建築から変わっていない。

○ 終戦

昭和20年8月の12、3日頃より福岡、岩田屋に15日正午玉音放送があるという垂れ幕が下っていた。何のことか全然わからず広島、長崎と、新大型爆弾が投下されたのは知っていたが。15日の終戦と同時に復員、引揚げが始まった。貨物列車には襟章なしの兵隊があふれ、モンペにリュックを背負い、髪をふりみだした引揚げの人が街にあふれた。

戦前の博多駅は東京駅に似た木造のモダンな建物であった。駅正面の左側は一、二等待合室、右側が三等待合室だったと記憶している。列車も一等は白色、二等青色、三等赤色と車輦が線引きで区別されていた。駅において一、二等待合室は威圧感を覚え近寄りたいたいものがあった。それが終戦と同時に浮浪者の住みつくとところとなった。構内に無雑作に蓆をかぶせた人が横たわっている。駅員が「この人だめばい」と言っている。栄養失調で衰弱し死んでいるのである。

列車は混み合って車内は人の気でむんむんしている。ふと、窓外をみると閑散としたアメリカの軍用列車が駅構内にすべりこんできた。すると黒人の兵隊がおりて構内のボックスに近寄りボトルを飲んでいる。「何かな」と半信半疑で見ると横文字でそのボックスには「コココーラー」と書いてあった。「さぞおいしかろうな」と一人つぶやいた。

駅前にはタバコ売りのオバサンが立ちならんでいた。「煙草いらんね」ハッピー10本入りを30円で買った。その煙草のおいしかったこと。ラッキーストライク、チェスターフィールドと外国製の煙草は高額で手が出せなかった。中洲の大洋と千代町の国際劇場には洋画が上映され私の心をさそった。

とりあえず食糧の買出しである。米は取締りがきびしく買出しに苦労した。大牟田より肥後伊倉の駅において、それから約4km歩いてカライモの買出しにでかけた。「米はやかましかけん、たいておにぎりにして持っていかんね」と農家のおばさんが言ってくれた。そのご飯の暖かくおいしかったこと、今でも忘れられない。当時はカボチャと大根の干したものを食べていた私には最大のご馳走である。

○ たわごと

戦争を体験した私にとって、今の若い人には羨望している。異性との交際、物資の豊富等恵まれた生活をしている。

しかし、いつの世にも悪夢の洗脳が襲う、それに打勝つためには自分自身の生き方を究める事が肝要である。そうしないととんでもない世の中を引き起こしかねないような気がする。